

# 日風園

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第108号 令和元年(2019)11月1日

資料見聞

## 織田信長朱印状 筒井順慶宛 個人蔵

第二次大戦後の高知県では、織田信長が発給した文書は一通しか確認されていません(※江戸時代も含め、それ以前には複数確認されます)。この貴重な一通が筒井順慶宛織田信長朱印状です。筒井順慶は現在の奈良県に当たる大和国を治めた大名です。それでは、

なぜ高知県に大和の大名宛の信

長朱印状が残されたのでしょうか。その謎をひもといてみたいと思います。

一見してわかるように朱印状の上部は焼失しています。これは、火繩に火が付いた火繩銃とともに置いていたため、燃えてしまったそうです。

他の資料によつて焼失した部分を補うと、  
積文は次のとお

りです。

急度申遣候、仍安土普請造畢次第、於京都天主可相立之候、然者大和国中大木等事、雖為一本不可伐候、但訴木以下不事立之木者、為私受用之儀も可有之候、至用木者、悉可立置事專一候、為其遣朱印候也、  
(天正四年カ) 七月十四日(朱印)

筒井順慶

簡単に解釈すると、安土城の築城が終わり次第、京都に天主を立てるので、大和国中の木は一本たりとも切つてはならない、となります。

年号は付されていませんが、信長は天正4年(1576)1月から近江国(現滋賀県)に安土城の築城を始めるため、同年に発給された文書の可能性が高いと思われま。気になるのは「京都天主」の文言です。天正4年7月の信長は安土城だけでなく、京都二条城の改修にも着手しており、そのことを指す可能性もあります。はたまた、京都に新たな城を造るといふ信長の新たな政治構想を指す可能性もあるなど、興味の尽きない内容といえます。このような重要な資料ですが、信長の発給文書を集めた奥野高広『信長文書の研究』には収録されておりません。

とはいえ、新発見!という訳ではなく、すでに『大川村史』(1962年発行)で詳しく紹介されています。まさしく知る人ぞ知る資料でしたが、長らく公開はされておらず、存在を知らない研究者も多数いるはず。偽文書の可能性も考えられましたが、専門家の方に写真を見てもらう限りでは、信長の朱印とみて間違いのないようです。

それでは、なぜこのような貴重な資料が土佐に伝来したのでしょうか。その謎を解く鍵は順慶の後を継いだ養子の定次にあります。定次は、慶長13年(1608)5月に改易となり、伊予国今治の藤堂家に預けられました。しかし、慶長20年(1615)に大坂冬の陣が始まると豊臣方への内通が疑われたため、自害したとされます。

ところが、定次は死なず、国境を越えて土佐国本川郷(現大川村・いの町本川)に潜入したという伝承が残されています。現在も同地には筒井姓の家が多く残っており、本資料も筒井姓の家に伝来したものです。

伝来の経緯は不明ながら、信長朱印状が残されていることから、右の伝承は、あながち作り話とも言い難いのではないのでしょうか。平家の落人が有名ですが、様々な流人の終着点としての土佐を物語る資料のひとつといえるでしょう。  
(石畑匡基)

# 企画展 おんる 遠流の地 土佐

会期：令和2年1月10日(金)～3月8日(日)

石畑 匡基

「遠流」という言葉を耳にしたこと

はありますか。古代より罪を犯し、流罪となった者はその罪の軽重によって、「近流」「中流」「遠流」の三流に処せられました。その中で最も重いのが、「遠流」でした。その「遠流」の地と定められたのが、佐渡や隠岐といった離島に加え、土佐でした。

この企画展では、「遠流」の地に定められた土佐に流されたり、落ち延びた人々にまつわる資料を紹介しながら、その実像に迫りたいと思います。

ところで、岡山県出身の私は大学進学を契機に高知に住むことになりました。その際、高校の同級生に「高知に島流しになる」と言われたことを鮮明に記憶しております。ところが、高知に来てみて高知県出身の大学の同級生らと話をしていると、「遠流」の地だということをして「肯定的に自認」しているのではないかと感じる瞬間が幾度かありました。これが「遠流の地 土佐」に興味を持ちだしたきっかけです。この「遠流」の地であることを「肯定的に自認」という土佐人の姿勢はいまに始まったことではないようです。

## ■「歴史」として語られる遠流

土佐の戦国大名である長宗我部元親は天正3年(1575)に現在の四万十市で勃発した渡川の合戦で一条氏を撃破し、土佐国統一を果たします。その帰途に幡多郡入野(現黒潮町)の松原に立ち寄り、土地の古老に対して、「かつて、尊良親王がいらしたところはどこか?」と尋ねました。すると、古老は「少し小高い松林の中に住居をかまえて住んでおり、土地の武士と歌の贈答もなさっていた」と答えました。元親はこれを聞き、「このような昔話を伝え聞いていたとは素晴らしい」と賞賛し、褒美を与えたといいます。

尊良親王とは後醍醐天皇の皇子で、鎌倉幕府倒幕を企てたため、元弘元年(1331)に土佐へ流されたという人物です。右の逸話は元親が亡くなった100年後に編まれた『土佐軍記』に収録されており、事実かどうかは疑問も残ります。とはいえ、江戸時代の土佐の人が300年以上前に土佐に流された皇子の話を伝承として紹介し、なおかつ土佐の英雄である長宗我部元親と結び付けたことが重要でしょう。

また、土佐の「歴史」を語る上で、欠かすことができない「歴史書」である『南路志』(全120巻、文化10年(1813)完成)の巻4には「僞幸」「配流」が立項され、古代から江戸時代まで土佐に流されてきた人々が紹介されています。

つまり、かつて土佐に流された人々がいたという「歴史」は土佐の「歴史」の重要な構成要素であったと考えられます。さらに、彼らが土佐の文化に何らかの影響を与えた可能性もあるでしょう。

それでは、各時代にどのような人が土佐に流されたのか、関連する資料とともに紹介したいと思います。

## ■奈良時代 石上乙麻呂

さて、土佐に最初に遠流となったのは天武6年(677)の屋垣王なる人物です(『日本書紀』)。その後も、『日

本書紀』などに土佐への配流の記事がしばしば登場します。その配流について、和歌や漢詩という形にして自身の言葉で表現した最初の人物が石上乙麻呂です。彼は、天平11年(739)3月に土佐へ流されます。

『万葉集』巻6には役人の配流を題材にした歌が多く、そこに石上乙麻呂が土佐へ流された時の歌が記載されています(写真1)。

その内の一首は「父君に、我は愛子ぞ、母刀自に、我は愛子ぞ、参い上る、八十氏人の、手向する、恐の坂に、幣奉り、我はぞ追える、遠き土佐道」とあります。大意は、「父や母にとつて最愛の子である私は、大勢の人々が都に向かう国境の坂へ向かい、遠い土佐への旅路に行く」となります。

大勢の人々が都へ向かう中、それに逆らって遠い土佐の地へ行かなければならないという心情が描写されています。乙麻呂は2年ほど土佐に滞在し、京都へ帰りますが、滞在中もいくつか漢詩を読み、当時の土佐の情景を今に伝えていきます。

## ■鎌倉時代 土御門上皇

鎌倉幕府ができて、武士の世の中になっても、土佐は相変わらず「遠流」の地として認識されていました。そして、天皇を退いた上皇が土佐へ流されることとなります。それが、土御門上

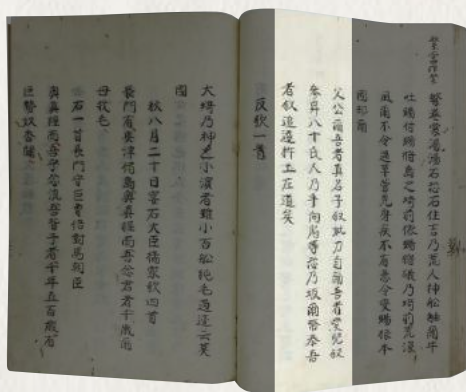


写真1

「万葉集」巻6 高知県立高知城歴史博物館蔵

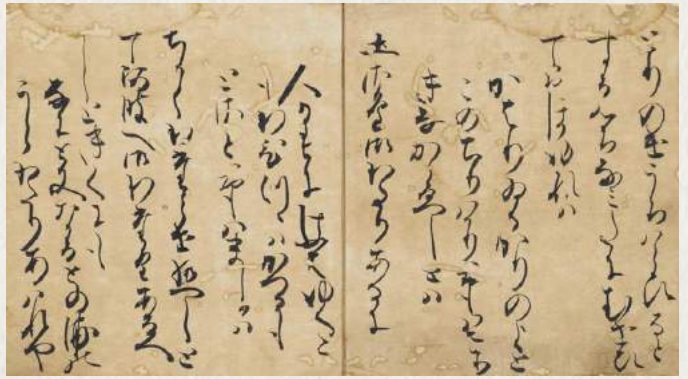


写真2「土御門院女房(日記)」 冷泉家時雨亭文庫蔵(重要文化財)

皇です。

土御門上皇は、建久9年(1198)に天皇に即位しますが、約10年後の承元4年(1210)に譲位し、上皇となります。上皇は和歌の達人で、京都でひっそりと暮らしていました。

しかし、承久3年(1221)に、武士の政治に不満を持った父の後鳥羽上皇が承久の乱を起こします。土御門上皇自身は乱への荷担はなかったと言われますが、父の後鳥羽上皇が隠岐へ、弟の順徳天皇が佐渡へ流されたため、自ら土佐への遷幸を決めたとされ、土佐幡多郡へ向かったと言われます。土御門上皇の側で仕えた女官は、土佐へ

旅発つ土御門上皇を見送りながら、次のように記しています(写真2)。

「土佐へ御渡りあるに、人数に、今日に行くともわびつつは、帰るも土佐と、思わましかば」

大意は、「上皇が土佐へご遷幸になるので、私も人並みに今日お見送りをして帰宅しましたが、気落ちしつつ思ってみると、上皇の遷幸地である土佐に帰るのだったら良いのに」となります。上皇について土佐へ行きたいという乙女心を読み取れるでしょう。

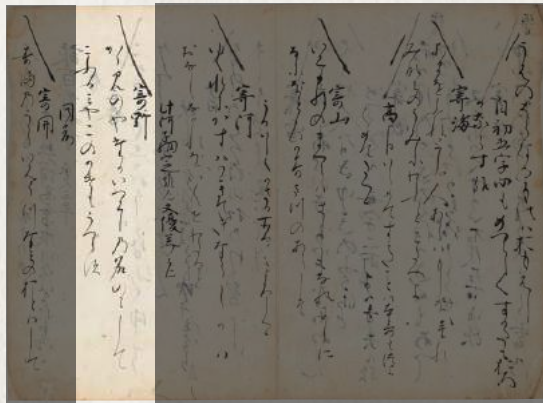


写真3「土御門院御集」 冷泉家時雨亭文庫蔵(重要文化財)

さて、1年半ほど土佐で生活した土御門上皇は阿波(徳島県)へ移ります。その途次にある月見山(現香南市)に登り、月を愛でながら次の歌を詠んだと伝わります(写真3)。

「鏡野や、誰が偽りの、名のみして、



写真4  
和歌石碑(高知県香南市)

恋うる都の、影もうつらず」

大意は、「鏡野という地名だが、誰が嘘をついて、この名を付けたのだろうか。恋しい都の姿が映らないではないか」となります。

月見山には右の和歌を刻んだ石碑も建立されていますが、写真3の史料の文字が採用されています(写真4)

阿波に移った土御門上皇は二度と都に戻ることはなく、同地で生涯を終えたと伝わります。

### 江戸時代 毛利勝永

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦において徳川家康に与した山内一豊は、その恩賞として土佐一国を与えられます。すると、関ヶ原合戦で敵対した大名である毛利勝信・勝永父子を預かるように江戸幕府から命ぜられます。「預」という言葉ではありませんが、流罪と同意で使われています。

土佐へ移った毛利父子は別々に暮らし、勝永は高知市久方に屋敷を与えられたといい、勝信は土佐で一生を終えます。一方で勝永は、配流地で平穏な

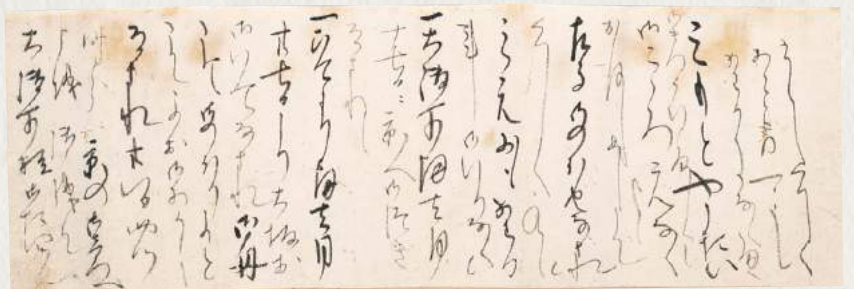


写真5「大野治長書状」 高知県立高知城歴史博物館蔵

日々を過ごしつつも、豊臣秀頼方の武将・大野治長と密かに通じていたよう、治長から勝永へ与えられた書状が残されています(写真5)。

書状には「豊臣秀頼が3月28日に京の御城へ御成して、大御所徳川家康と御対面」したことが記されています。京の御城とは二条城を指し、慶長16年(1611)豊臣秀頼と徳川家康との二条城での会見について、治長は勝永へ伝えたのです。



写真6「白糸威水牛形兜」  
高知県立高知城歴史博物館蔵

このように、豊臣秀頼方と連絡を取っていた勝永は、慶長19年（1614）に土佐を脱出して、大坂城へ入城します。翌年には大坂冬の陣で活躍するものの、大坂夏の陣では大坂落城とともに命を落としたとされます。その際に、勝永は着用していた兜と陣羽織を家臣の宮田甚允に託し、それが勝永の子孫に届けられ、現在に伝えられています（写真6）。

このほか、公家である滋野井実光や、伊達政宗の息子である伊達宗勝など、様々な人物が江戸幕府から土佐藩へ預けられました。

### 江戸時代 土佐藩の追放刑

江戸幕府から罪人を預かる一方、土佐藩内でも罪人を追放する刑罰が存在しました。土佐藩主が家老に預けるため、こちらも「御預」と呼ばれました。

例えば、本山土居に居住した家老・永原（山内）但馬は元和6年（1620）12月に佐川土居に住む家老・深尾家に預けられます。佐川土居の絵図には但馬が預けられていた屋敷が描かれています。



写真7「佐川土居図」抜粋  
安芸市立歴史民俗資料館蔵

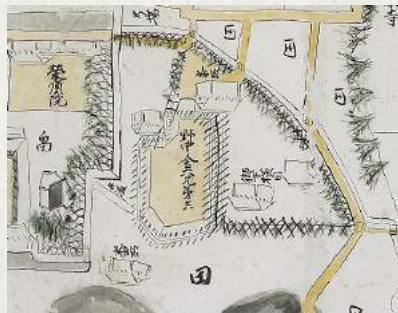


写真8「宿毛絵図」抜粋  
安芸市立歴史民俗資料館蔵

ます（写真7）。

「御預ケ 永原一味」と記された家の周囲が竹垣のようなもので囲まれており、自由な行動が制限されていたとみられます。それでも嚴重そうに見えますが、寛文4年（1664）に宿毛土居の安東（山内）家に預けられた野中兼山一族の屋敷はもっとも嚴重な警備の様子が見て取れます（写真8）。

「野中金六兄弟共」と記された周囲は高い塀で覆われ、塀の上部にはトゲが付けられています。さらに、「番所」や「御下横目」と記された小屋があり、より嚴重な警備だとわかります。この

差は罪の軽重ではなく、幕府の規定に合わせてためだと推測されます。

寛文11年（1671）、伊達政宗の息子・宗勝が幕府から土佐藩に預けられます。その際、幕府は宗勝の屋敷の絵図を提出させるなど厳しい態度で臨んでおり、当時の藩主・山内豊昌も他藩での預人の屋敷の事例を調べ、不測の事態がないように努力しています。

宗勝が居住した屋敷の絵図は残っていません。しかし、土佐藩内では、野中兼山の遺族の屋敷について、「今まで警備が緩かった訳ではないけど、伊達宗勝の屋敷について幕府からいろいろと指示を受けたので、それに沿うように兼山の遺族の屋敷についてもより嚴重にする」ことになったそうです。

右のように土佐藩の家老に罪人を預けたほか、城下町から罪人を追放する「禁足」といった刑罰もあり、例えば幕末の参政である吉田東洋も一時、禁足によって城下を追放され、長浜に移り住むなどしていました。

### 明治時代 監獄の誕生

明治5年（1872）に日本最初の監獄立法である「監獄則」が制定されると、西洋に倣った施設が建設され、土佐など遠流の地に罪人を「預ける」ということはなくなりました。

例えば、明治10年（1877）に西郷隆盛が西南戦争を起こすと、それに

呼応して自由民権運動を指導した高知の政社・立志社の幹部も蜂起を企てます。しかし未遂に終わり、片岡健吉などの幹部は逮捕され、100日から10年の禁獄の刑に処せられました。同じく逮捕された野崎正朝が獄中で記した日誌には山梨・静岡・栃木などへ片岡健吉らの幹部が分散して収容されていることがわかります。さらに、ロシア



写真9「獄中日誌」  
高知県立高知城歴史博物館蔵

の南下政策に対抗するため開拓が急務とされた北海道には集治監という監獄が多く作られました。そして、監獄、刑務所へと名を変えながら、現在に至ります。

以上、奈良時代から明治時代にいたるまでの遠流の地 土佐の歴史を簡単に紹介しました。ただし、ここで紹介したのはほんの一部です。ぜひ、展覽会に足を運んでいただけましたら、幸いです。

# コーナー展 「千支えとの玩具ね子

会期・令和元年12月13日(金)～令和2年1月26日(日)

来年の干支「子」にちなみ、全国各地のねずみ玩具を展示します。

ねずみは農作物や家具などを食べる害獣として嫌われがちですが、ねずみの郷土玩具は、その逆に五穀豊穡の縁起物として親しまれてきました。

というのも、ねずみは豊作の神である大黒天の使いとされているからです。そのため、郷土玩具のねずみは、大黒天が持つ打ち出の小槌や大黒天が乗る米俵と組み合わせられることが多く、大黒天の面を持つてこれから神楽を舞いそうなのねずみや、大黒天を乗せた巨大ねずみなどユニークなものもみられます。



相良人形 (山形県)



香泉人形 (高知県)



花巻人形 (岩手県)



堤人形 (宮城県)

また、「ねずみ算式に増える」と例えられる繁殖力の強さから子孫繁栄や財運を象徴し、親子ねずみや小判をくわえたねずみもいます。

唐茄子(かぼちゃ)やとうもろこしなど種の多い植物と多産なねずみの組み合わせは、子宝に恵まれるようにとの願いがこめられていともいわれま

す。赤と白のコントラストがあざやかな唐辛子ねずみもそのひとつで、京都の伏見人形をはじめ各地で作られ続けているモチーフです。

このようにねずみの玩具にはさまざまな願いがこめられていますが、そればかりではなく、遊び心もこめられているのが郷土玩具の楽しいところ。ねずみと天敵の猫との組み合わせもあり、一緒にクルクルまわったり、猫に追われて箱のなかにスツと隠れたりといったからくり玩具も軽妙です。

ところで、ねずみは干支の1番目の動物で、「干支頭」や「干支はじめ」と呼ばれます。しかし、当館では10番目に登場しました。

1番目はうさぎでした。平成22年(2010)に郷土玩具収集家の山崎茂氏からコレクションを寄贈され、そのお披露目の企画展「昔のおもちゃ博物館」の一角に約100点展示したのがはじまりです。

山崎氏は、干支の玩具を昭和60年(1985)から平成12年(2000)

まで正月に高知市図書館で展示してました。平成17年(2005)以降の町の草流舎(代表 田村雅昭氏)で6回にわたって展示され、その後、当館が引き継ぎました。

今回も山崎氏の玩具を中心に100点ほど展示し、山崎氏の先輩にあたる収集家、城田政治氏の寄贈コレクションからも数点ご紹介します。

また、今回の見所のひとつは、年賀郵便切手になった歴代のねずみ玩具です。来年の年賀郵便切手は、明治から昭和にかけておもちゃ絵の画家として活躍した川崎巨泉が描いた伏見人形の小判ねずみと唐辛子ねずみですが、モチーフになったねずみたちを展示する予定ですので、会場で探してみてください。どうぞお楽しみに！(中村)

# 交流の場としての博物館

国際博物館会議（ICOM）京都大会見聞記

梅野光興

9月1日から7日まで、京都市で世界中の博物館関係者が集まるICOM（国際博物館会議）が開催されました。

1948年から3年に一度行われていた大会ですが、日本では初めて。日本も含めて世界中から4千人を超える参加者があったそうです。私は9月3日（火）・4日（水）の2日間だけ参加しました。

## 地球の抱える問題に向けて

とにかく外国人の多さにびっくり。特に3日は日本人の姿は少なかったような気がします。講演も討議も英語中心で、同時通訳レシーバーが無かったですらどうなっていたことか…。

次に驚いたのはその内容です。博物館の大会というので、展示方法や資料保管のテクニックが情報交換されるのかと思ったら、最初の講演は環境破壊が進むアマゾンの自然と文化を守ろうというもの。9月2日は「博物館と持続可能な発展」や「脱植民地主義」がテーマでした。戦争や貧困、自然破壊など現代の世界が抱えるさまざまな問題に対して博物館はいったい何ができるのか？というアクチュアルなテーマが中心で、入館者の増減に一喜一憂し

ている私としては、頭をガツンと叩かれた気持ちがありました。

## 被災時の博物館

4日に「被災時の博物館」というセッションがありました。プエルトリコのミュージアムは、ハリケーンによって町が大きな被害を受けた後、コミュニティに存在を知らすために一週間で館を再開させたそうです。トラウマを癒やすために文化財は有効で、人々がうちひしがれている時こそ、希望や強さをコミュニティに提供することが必要だとのお話でした。博物館は防災計画に入っていないことが多く、文化財は災害時の優先度も低いので、日頃から防災担当者に文化財の重要性や、ミュージアムは遺産や記憶が残っている所なのでコミュニティにとって重要なのだということを理解してもらうことが重要だとの意見がありました。

## アジアのアートの特徴

また「世界のアジア美術とミュージアム」というセッションでは、西欧とアジアの美術の違いが興味津々でした。アートというものが独立している西洋と違って、アジアでは宗教彫刻や建築物の装飾などともアートではな

かったものが、アートとして認識されていくのが特徴です。当初はアジア美術を生活文化から切り離して美術として鑑賞していたのですが、最近では本来の文脈や配置に注目する方向に変化してきているそうです。アジアにおけるマテリアルカルチャーとアートとの境目は？アートとノンアートを区別するとはどういうことか？国際討論ならではの刺激的な領域に入ったところで時間切れでした。

その他「マンガ展の可能性と不可能性」も、今年大英博物館で「マンガ」展を成功させた担当者のレポートをはじめ興味深いものでした。

## フォーラムとしての博物館

大会の一部をのぞき見ただけですが、「コミュニティ」「文化的ハブ」「持続可能性」という言葉は本当に合言葉のように繰り返されていました。

調査研究・収集保存・展示・教育などの博物館の基本的な役割を重視しつつ、ではどのように博物館が社会にとって必要なものとなるのか？いや、もっと進んで、社会が精神的にも経済的にも豊かになるためにミュージアムは必要だ、という自信に満ちた世界の参加者の声が印象的でした。

国立民族学博物館の吉田憲二氏が分科会で述べていた「テンブルからフォーラムへ」が改めて心に残りました。



120の国と地域からのべ4590人の参加者が集まった。

「テンブル（寺院）」は、有り難いコレクションを見せ、教育プログラムで来館者に知識や情報を（一方的に）伝授する場所、フォーラム（広場）は、人が集い、協働する場と言えるでしょう。人が集い思い出を作り上げる場所こそ博物館だとも言われていました。「ICOM博物館定義の再考」では、ミュージアムは意見や歴史文化の違う者が議論や対話をするフォーラムであらねばならないとの意見がありました。異論を封じ込めるのでは無く、さまざまな異なる物の見方や考え方が行き交う場所としてのミュージアム。新しいアイデアや未来はそのような場所からしか生まれません。そうなるために何ができるかを、少しずつでも考え始めることができればと思います。

予告 第12回四国地域史研究連絡協  
議会大会 高知県立歴史民俗資料館  
シンポジウムの開催 12月1日(日)

「四国地域史研究連絡協議会」とは、四国4県の地域史研究団体などによって組織され、毎年「四国は一つ」を合言葉に研究大会を開催しております。今年も高知大会の年で、当館において「高知県立歴史民俗資料館シンポジウム」も兼ねて開催いたします。今年のテーマは「豊臣政権下の四国」と題して開催しますので、四国制覇目前に豊臣秀吉の前に敗れた長宗我部元親の居城である岡豊城の地に建つ当館で行うにふさわしいテーマといえます。その告知も兼ねてここではシンポジウムの趣旨や内容について簡単に触れたいと思います。

天正13(1585)年、長宗我部元親が豊臣秀吉に降伏し、土佐一国を安堵されます。それにより、土佐を除く四国の他国には豊臣系大名が配置されます。

高知大学の津野倫明先生によると、「秀吉は四国諸大名を『四国衆』なる集団として認識しており、それは水軍としての軍事力を期待しうる大名の集団といった観点にもとづいていた。豊臣政権側すなわち外からみた四国はかねてより一括しうるものだった」と指

摘されています(同「慶長の役における『四国衆』」)。

一方で、「四国内の諸大名の実態とこれら諸大名を統治する秀吉の認識との懸隔」の存在にも言及されています。つまり、豊臣秀吉は四国を「一括」として認識していたものの、四国における諸大名は必ずしも一枚岩ではなかったということですね。しかし、豊臣政権下における四国諸大名の実態は必ずしも明らかにされているわけではなく、そもそも四国諸大名の個別研究を進展させることがまず必要ではないでしょうか。そこで、本大会では「豊臣政権下の四国」と題し、各国に配置された諸大名の領国支配や政策など実態解明を進めることになりました。

本大会では、津野先生にシンポジウムの司会・進行をお願いするとともに、四国各県からの報告者が豊臣秀吉の時期の大名の実態について報告します。高知代表は当館学芸員の石畑がとめます。さらに、基調講演として九州大学の中野等先生が「豊臣政権下の四国」と題した講演を行います。聞き応えのあるシンポジウムになることは間違いありません。

参加は自由です。地域史研究や歴史教育に携わるみなさんや、地域史に関心を持つみなさんの参加をお待ちしております。

(石畑)

出張ーもとちか君

「第6回ご当地キャラまつりin須崎」

令和元年9月14日(土)・15日(日)

ぼくは高知県立歴史民俗資料館のマスコットキャラクター、「若武者もとちか君」だよ。土佐の戦国武将「長宗我部元親」をモデルとして生まれたキャラクターなんだ。歴史館のイベントのときにはパトロールしてるから、みんな知ってるよね。ぼくの仕事は、お友達をいっしょにつくること。だから今年もしんじょう君からのお誘いで、ご当地キャラまつりを開催する須崎市まで行ってきたよ。2日とも、とってもいいお天気！天気予報での最高気温、34度だつて。高知の9月は夏だもんね。暑い中、会場に来てくれた人は2日間で2万人！ぼくも歴史館のチラシを配ったり、みんなと記念撮影したりと大忙し。キャラ友さんも100体ぐらい全国から集まってくて、熊本の鞠智城きくちじょうから来ていた「ころし君」ともお友達になったよ。歴史館が建つ岡豊城跡は国史跡で歴史公園になっているけど、鞠智城もそつなんだつて。熊本にも行ってみたいいな！

また、歴史館や出張のぼくを見かけたら、声をかけてね！

(若武者もとちか君)



名刺差し上げます。よろしくね！



くろしおくん、お久しぶり！



オリジナルグッズ、続々入荷中！



富山の三太くん。みんなで写真撮ろう！



熊本のころし君。頭に八角形鼓樓がのってるよ！

**予告** 企画展 **金剛福寺**  
 令和2年4月24日(金)～6月28日(日)  
 足摺岬を見下す丘の中腹に位置する第38番札所礎陀山補陀落院の金剛福寺では、本堂に安置されている本尊を含めた30体を超える県指定の仏像を十数年かけ順番に修復してきました。その成果を公開します。

**れきみんのお正月** **予告**  
 令和2年  
 1月2日(木)・1月3日(金)  
 各日の催しの詳細はお正月のチラシにてお知らせします。




**国史跡・岡豊城跡めぐり**  
 当館が立地する長宗我部氏の居城跡・岡豊城跡を案内人のガイド付きで散策。  
 毎週日曜日(12/29を除く)10時出発  
 Aコース 約30～40分 / Bコース 約60分  
 事前予約不要、資料館観覧券要  
 ※雨天・荒天時は中止。

**学校団体等のご利用について**  
 高校生以下は**無料**です。引率の先生方は利用届のご提出により**観覧料が免除**されます。  
 展示見学に加えて、映像の視聴、展示室を回りながら答えるクイズプリントもご用意できます。  
 勾玉作り・火おこし・甲冑体験・民家体験などの体験学習をご希望の場合は、事前に当館学芸課へご相談ください。(電話088-862-2211)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第108号  
 令和元年11月1日  
 編集・発行 (公財)高知県文化財団  
 〒783-0044 高知県立歴史民俗資料館  
 南国市岡豊町八幡1-099-1  
 TEL 088(862)2211  
 FAX 088(862)2110  
 開館時間 午前9時～午後5時  
 休館日 年末年始12月27日～1月1日  
 臨時休館あり  
 観覧料 (通常展)大人(18才以上) 470円  
 団体(20名以上) 370円  
 (企画展)吸江寺・通常展 700円  
 団体(20名以上) 560円  
 (企画展)遠流の地・土佐通常展 520円  
 団体(20名以上) 420円  
 無料: 高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)  
 印刷・川北印刷株式会社  
<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/>  
 Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 **おんる 遠流の地 土佐**  
 令和2年1月10日(金)～3月8日(日) 会期中無休  
 古来より最も重い流刑地のひとつとして知られる土佐。土御門上皇や毛利勝永など、土佐に流されたり、落ち延びたとされる人々にまつわる資料を分析し、「遠流の地 土佐」の実情に迫ります。



- 連続講座  
 「通史でとらえる日本の流刑」各時代の講師が流刑の歴史を深く掘り下げます  
 各日14時～15時30分  
 要予約・要観覧券
- 令和2年1月19日(日)「古代の流刑」  
 講師:福岡市博物館学芸員 佐藤祐花氏
- 令和2年2月1日(土)「中世の流罪と土佐」講師:明治大学教授 清水克行氏
- 令和2年2月24日(月・振休)「幕藩体制における「預人」」講師:当館学芸員 石畑匡基
- 令和2年3月7日(土)「近代の流刑・徒刑—北海道に送られた囚徒の処遇について」  
 講師:九州大学医学歴史館学芸員 赤司友徳氏
- 土佐の硯と和紙を体験しよう  
 普段見る機会の少ない、三原村名産「土佐硯」の加工実演を行うほか、実際に土佐硯を使って土佐和紙に字を書く体験もできます。  
 令和2年1月19日(日) 上級編〈展示資料の字をなぞろう〉  
 令和2年2月24日(月・振休) 初級編〈お習字体験〉  
 両日とも10～16時 随時受付 参加費無料  
 実演:土佐硯職人(三原硯石加工生産組合)
- ミュージアムトーク  
 令和2年1月25日(土) 2月11日(火・祝)、3月8日(日)  
 各日14時～14時30分 予約不要・要観覧券
- ベビーカートゥアー  
 令和2年3月3日(火) 14時～14時30分  
 未就学児とその保護者対象に展示内容を易しく解説。  
 要予約(先着5組)・要観覧券

**コーナー展**  
**予告** **えと 干支の玩具子**  
 令和元年 令和2年  
 12月13日(金)～1月26日(日)  
 郷土玩具収集家・山崎茂氏のコレクションから干支にちなんで全国のねずみ玩具を展示します。  
 相良人形(山形県)



**コーナー展**  
**予告** **おひなさま**  
 令和2年2月1日(土)～3月15日(日)  
 郷土玩具の「変わり雛」。独楽や凧、土鈴になったおひなさまをご紹介します。



瓢箪雛(栃木県)